

感染症法における播種性クリプトコックス症の 取扱いについて

平成26年6月
厚生労働省健康局結核感染症課

播種性クリプトコックス症

現状

- クリプトコックス症は健常者に発症する深在性真菌症としてわが国で最も頻度が高い。
- 致命的な播種性クリプトコックス症は、脳髄膜炎としてみられることが一般的であり、JANISの検査部門データによれば脳脊髄液培養陽性例の2～4%程度を占め¹⁾、発生は年間200～400例程度と推定される。脳髄膜炎原因の病原体別頻度ではクリプトコックス属は肺炎球菌とほぼ同数で4～5番目に多い。主な原因菌は*Cryptococcus neoformans*である。
- 近年、致命率が20%と高い*Cryptococcus gattii*感染症例が、カナダで1990年代から、米国では2004年頃から報告されるようになり、また*C. gattii*の感染が拡大していることが米CDCから報告され²⁾、わが国での発生が注視されていた。わが国では2010年の国内発生第一例目以来³⁾、2014年3月末現在で少なくとも4例が確定されている。

必要な対応案

- 以下を実施可能とするために、発生動向を把握をしてはいかかがか。
 - 国民や医療関係者に情報提供・注意喚起を行う。
 - 播種性クリプトコックス症は地域流行することがあるため、多発する場合には必要に応じて積極的疫学調査を実施して感染源を同定する。
 - *C. gattii*による播種性クリプトコックス症は従来輸入感染症と考えられており、特定の地域から帰国した邦人の発症が複数例確認される場合には、必要に応じて渡航に関する注意喚起を行う。

論点

- 播種性クリプトコックス症を五類全数把握疾患とすることについてご検討頂きたい。

※ なお、本提案については、同旨の要望書が日本感染症学会より結核感染症課長宛て提出があったところ。

参考文献

1) <http://www.nih-janis.jp/report/kensa.html> 検査部門JANIS期報2) MMWR vol.59 No.28. 2010.3) Emerg Infect Dis 16: 1155-1157, 2010